

うに退き鉦が鳴りだした。法螺貝の音もひびいた。寄せ手の軍勢は算をみだして敗走した。城の上からは、こゝを先途と矢をおくつた。逃げる敵をねらふのは、おもしろい程によく當るものだ。

「追撃だ。おれに続けつ」

兵庫介はつり橋をおろさせ、大刀をふるつて追撃に出た。數十名の兵が、白刃をかざして續いて駆けた。

だが、この追撃は、坂の降り口まで進んだとき、敵の手痛い反撃をくつた。逆に敵の急襲のやうな矢玉の集中をうけたのである。なにしろ大軍の敵のことだ。眼もあけてゐられないほどの矢攻めであつた。

たちまち、十数名の兵が倒れた。

「返せ」と叫びざま、兵庫介は懸命に駆けもどつた。鎧の袖に二三本の矢が突きさゝつて折れた。倒した敵の屍體や重傷者の上を飛び越え踏み越え、やつとのことで木戸の中へ躍りこんだ。一瞬の間に、二十名に近い戦死者を出してしまつたのである。

「長追ひしたのが悪かつた」

兵庫介はあやまるやうに興武にさう言ひ、苦笑しながら顔の汗をふいた。のびた髭と、垢と埃とによごれた顔であつた。

「あなどり難い敵だ」と、興武もつぶやくやうに言つた。

あなどり難い敵は、西尾崎の大手口を攻める敵よりも、むしろ南尾崎の搦手を攻撃して来た敵の方であつた。

搦手は栗生才治右衛門が防備の指揮を取つてゐたが、敵の強襲は死傷をいとはず繰りかへされた。ばた／＼と射たふされながら、何重もある逆木さかきを乗り越えて肉薄して来るいきほひが、たとへやうもなく凄まじいものであつた。

倒しても倒しても、あとから／＼と新しく攻めよせて来た。一部の敵兵は木戸口のころまで攻めかゝつて、危ふく破られさうになつた。栗生は自ら太刀をふるつて、この襲撃をやつと叩きつぶした。また一部の敵兵は切岸の下の壕ぼりを奪つた。栗生は石の津波をあびせる指圖をした。ごう／＼と起る響きの中に、敵兵は土煙につままれ、なだれ落ちる岩石の瀧のために押しつぶされ、生き残つた者はあわてふためいて逃げて行つた。

しかし、どれほど敵を倒しても、すぐに後詰ごづめの敵が強襲して来るので、防禦がだん／＼

苦しくなる合戦であつた。どれだけ死んでも、替りの兵はいくらでもあるぞ、と云ふやうな敵の攻め方である。

かうなると、大軍の威力がひし／＼と頭上にのしかゝつて来るやうで、小勢の城方は心の持ち方の上で押され氣味になつた。一間と幅のない急な坂をよぢ登つて来る敵を挟んで、味方は高い位置から押しつゝんでゐるのだが、このまゝ、いつまでも限りなく新手をくり出され、強襲をつゞけられるのでは、しまひに受け切れなくなるのは當然であつた。やがて正午にならうとしてゐた。

このとき、新發源源秀のひきゐる遊撃隊は、手負ひのゐのしゝのやうな凄壯なすがたで、恩智川の東側の田圃の中を北へ向かつて突き進んでゐた。亂戦に次ぐ亂戦、死闘に次ぐ死闘の中で、隊員の大部分は壯烈な討死をとげてしまつてゐた。大薙刀を振りまはしてゐた鷲地九郎も死んだ。六尺の白刃を振りおろしてゐた平岡莊司も死んだ。今は源秀につゞく者わづかに百騎たらずであつた。

源秀は敵から奪つた薙刀をかざし、敵から奪つた葦毛の馬を疾驅させてゐた。絶え間のない亂戦死闘に、自分の大刀はのこぎりの刃のやうになつて使ひものにならぬので、腰の鞘にをさめてしまつたのである。馬も乗りつぶし／＼して、すでに何頭めかの敵の馬だつた。

源秀と肩を並べて疾驅する丹下兵衛次郎も、自分の槍は折れ、大刀は刃こぼれし、おなじやうに敵の薙刀を奪つて小脇にかいこんでゐた。馬も乗りつぶして、これも何頭めかの敵の馬だつた。

その他の兵たちも、みんな敵の武器を奪ひ、馬を乗りつぶしては敵の馬を奪ひ、乗り替え／＼して疾驅して來た。

菊水の旗もむざんに切り裂け、上部の紋所のあたり三尺あまりが棹についてゐるきり。それも血痕と泥とによごれてしまつてゐる。旗持の兵も倒れて今は二人目であつた。源秀の鬪體の旗差物も、鬪體のところか斜に半分ばかり斬りそがれ、白地のところはまるで赤黒い地色だつたかのやうに敵の返り血に染めつけられてゐた。

源秀が、高野街道を一文字に師直の本陣へ突進する豫定を變へ、しだいに馬首をこの恩智川の東側へと向けたのは、一つには、この調子では師直の本陣を突くまでに、一兵も残らず全滅するだらうと思はれたのと、いま一つには、すでに正行の本隊も突撃を敢行して

ゐるだらうから、この遊撃隊が、その時まで敵の注意を集めて、牽制するといふ作戦の目的も達したので、今は一時も早く本隊へ合した方がよいと考へたためであつた。

しかしながら、高野街道からそれたからと云つて、決して敵兵が手薄なわけではない。至る所が敵陣なのである。

今も南部次郎左衛門尉の軍勢、二千餘騎の重圍をやつと突破し、二町ばかりも田圃なかを北へ駆けたかと思ふと、またも前面と左右の三方面から、つなみのやうな敵勢が押し包むやうにして、関の聲をあげながら邀へ撃つて來るのだつた。

「離れよ」になるな。一かたまりになつて、敵のまつ只中を駆け抜けるのだぞ」

もはや噓れた聲で源秀が指圖すると、兵たちも干からびた咽喉をしぼつて悲壯な喊聲をあげ、一團となつて敵中に突つこんだ。

左右の敵には眼もくれぬ。後から追ひすがる敵にも眼もくれぬ。たゞ前をふさぐ敵だけを薙ぎ倒し、斬り伏せ、馬蹄にかけて蹴散らして行く。たゞ前へ前へと疾驅をつゞけるのみだ。

源秀と並んで、大薙刀を振り廻して敵を薙ぎ伏せ、割り倒してゐた兵衛次郎が、

「無念、……」と叫んで、どつと馬から前のめりに轉がり落ちた。

轉がり落ちながら、丹下の體の何處かから、さつと血しぶきが噴きあがつた。

「お、兵衛次郎」

源秀は思はず手綱を引いた。

敵兵が數名、倒れた丹下の上に折り重なつて首を搔かうとしてゐる。

「おのれ」と、源秀は薙刀を横に拂つた。

敵兵の一人は、血けむりを上げて倒れ、どの敵兵かの手首が拔身を握つたまゝ宙に飛んだ。残りの敵兵もぱつと飛びのいた。

「丹下しつかりしろ」

どなると、兵衛次郎はぐつと半身を起したが、すぐにぐたりと子をついた。

「丹下、これに縋れ。おれの馬に一しよに乗せてやる」

源秀は馬上から薙刀の柄をのばしたが、兵衛次郎はやうやく顔だけをもたげて、あへぎく言つた。

「源秀殿、お先に御免。お館へ、よろしくたのむ」

「うゝむ、助からぬのか。よし、もしも生きて會へたら、お館へ必ず傳へてやるぞ。許せよ」

唇を噛んで、源秀は馬首を立て直した。

——畜生つ。

敵へ對する怒りは、味方が倒れるたびに燃えつゝのる。

源秀の薙刀は、前から斬りかゝつた敵兵の肩先を深く割りさげた。

そこから二十町ばかり北の野々宮の森で、正行たちは血刀をさし上げて鬨の聲を三唱してゐた。血にまみれ、切り裂けた菊水の旗と芥子あざみの旗とが、高く差しあげて打ち振られた。

やつとのことで、この森を確保したところだつた。

この森を奪ふために、正行は自分でも劍をふるつて敵を斬つた。緋緘しの鎧にも、龍がしらの兜にも、赤地錦の直垂にも、敵の返り血が赤黒い斑點をつくつてゐた。

「残りの兵は、どのくらゐかな。六百はゐるか」

と、正行が言つた。さすがに、呼吸は少し荒かつた。

「七百」

と、正時が答へた。

「湊川では、最初から七百さきりだ」

さう高家が叫ぶと、

「それで七十餘合、戦はれた」

と、關地良圓がするどく言つた。

——師直は討てる。

正行はりゝしい眉をあげて、につこりした。

師直の倚せかゝりの輪違ひの旗まで、この森からは六町ばかりの距離しかなかつた。

だが、この森は、今や遠卷に取りまかれ、十重二十重に包圍されてゐた。師直に迫るには、この強固な包圍の堅陣を突破しなければならぬのだ。

正行は、師直の輪違ひの旗があるそこから逃げ出さぬかぎり、出来るだけ兵を休息させようと思つた。

兵たちは皆、自分の血と敵の血と土埃とにまみれ、下着も籠手も脛當も、裂けちぎれて

ゐた。疲れきつてゐたし、みんな咽喉の渴きに苦しんでゐた。さつきまでは川があつたが、今はその川は敵の包圍の外側にある。はげしい合戦に、瀧のやうに流した汗のため、からだ内の水分をすつかり無くしたやうな思ひで、みんな肩で息をしてゐた。口の中も、咽喉もねばりついてしまつてゐた。

しかし、兵たちの意氣は決して衰へはしなかつた。かへつて、意氣はますますさかんなる一方であつた。この兵のうちには、渡邊橋で川の中から救はれ、昨日往生院まで出向いて、正行の家來となつた者どもゝゐた。大部分がすでに討死して、柴生小太郎ほか十名ばかりが残つてゐた。

正行は、森の中に休息する兵たちを見て廻つた。いづれも傷をおはぬ者はなく、中には死の迫つた重傷者もあつた。

正行は、一人々々に聲をかけてねぎらひ、傷口の痛みを問ひ、出血のひどい兵には、更に自分で繃帶をしてやつた。

柴生小太郎は、左右の足とも傷ついて血のしみた繃帶をしてゐた。

「それでは戦ひも出来ぬの」

と、正行がいたましましさうに見やると、

「坐つたまゝで戦ひます」

小太郎は冗談を言つて笑つたが、

「なに、少しちんばを引くだけで、歩くにも走るにも、差し障りありません」と答へた。

森の周圍を取りまいた敵は、さかんに鬨の聲をあげていどみはじめた。陣鉦・法螺貝・太鼓を打ち鳴らして氣勢を添へた。

「いざ、師直の本陣へ最後の突撃を」

正時が兄を見やつた。

「うむ」と言つて、正行は大きくうなづいた。

部將たちの手勢を集合させ、隊形をととのへる號令が森のあちらこちらで響いた。

周圍の敵は、この森へ矢玉を集中し始めた見え、正行たちのところにも二すぢ三すぢの矢がとゞきだした。

正行は太刀の目釘をしらべた。金象眼の柄が美しく陽に映えた。澄み切つた正月五日の

陽の光が、正行の兜の黄金の龍がしらと、大鎧の小札の金色をきらめかした。

——師直を討つか、討たるゝか、二つに一つの勝負は、あと一とぎの間にきまるのだ。

正行の心はよろこびにふるへた。今ぞ大義に死し、大義に生きる時は来たのだ。

總大將正行をはじめ、部將、兵たち、一せいに南の方角へ向かつて直立し、遙かに主上ゐます吉野の行宮を拜して静かに祈念をさゝげた。

ちやうど、その時であつた。にはかに森の西側の方にさうざうしい叫び聲がきこえたと思ふと、旋風のやうに森の中に駆けこんで来た騎馬の一團があつた。

すは敵の強襲かと、正行は身構へたが、同時に、

「おゝ、源秀」

と、おもはず聲をあげて駆け迎へた。

新發意源秀と、従ふもの五十騎、いづれも血みどろになつて、南部千葉介の陣のまつ只中を突きぬけて来たのである。

「新發意殿つ」

「源秀殿つ」

感きはまつて、涙ぐんだ叫びをあげる者もあつた。

五百騎が十分の一に減つたけれど、この勇猛な遊撃隊は、みごとその使命をはたし、何萬といふ敵の中を、死闘につぐ死闘をくり返しながら、遂に突風のやうに突破して本隊に合し得たのである。

馬からおりた遊撃隊の生き残りの兵たちは、その血まみれの體を本隊の兵たちに抱きかゝへられ、口々に賞め言葉をあびせられてゐた。

「源秀、よくぞ戻つた。えらいぞ〜」

和田高家も、弟の大きな肩を抱いて、その眼に珍らしく涙を見せた。

源秀は兄に肩を抱かれ、血まみれの薙刀を杖に押し立て、血と土埃と汗とに赤ぐろく汚れた顔をにや〜と薄ら笑ひにほころばせたまゝ黙りつゞけてゐた。

正行も黙つて、戻つて来た遊撃隊の兵たちを一人々々眺めわたした。

高家も、生き残りの兵たちの顔を見まはして、

「驚地九郎はどうした」

と、聞いた時、源秀は初めて薄ら笑ひを消し、沈痛な顔で、ぶつきらぼうに答へた。

「死んだ」

高家はまた、

「平岡莊司は」

と尋ねた。

「死んだ」

つゞいて高家は、

「丹下は」

と、低い聲で言つた。

「死んだ」

高家は口をつぐんで、その外の姿見えぬ者の名は挙げなかつた。

「源秀、よくやつてくれた」

と、正行がやさしく禮をのべた。

「なに……」

と、源秀は笑顔を見せた。

「これから、われらも最後の突撃を始めるところだ。しばらく休息して、一しよに突つこむか」

「おう、最後の突撃に……」

源秀は躍りあがるやうにして、戻つたばかりの遊撃隊の兵たちに向かつて、

「みんな喜べ、殿が最後の突撃に間に合つたぞ」

と、しやがれた聲で、のど一杯に叫んだ。

それを聞くと、疲れ切つた遊撃隊の生き残りの兵たちも、わあーつと、嗚れ聲をしぼつて喊聲をあげ、よろ／＼と立ち上つて、もう合戦の身づくろひに取りかゝつた。

凄壯な突撃であつた。

不死身の突撃であつた。

鬼神も避ける突撃であつた。

もはや、いちいち名乗りをあげたり、のんきな一騎討ちの勝負などではなかつた。

身うごきも出来ぬほどの敵の大軍の中を、無二無三に薙ぎ倒し斬り伏せ、そこに生じた隙間を押し分けて前進し、また眼の前の敵兵を薙ぎ倒し、斬り伏せて行く前進であつた。

急にくもつた空から、灰のやうに細かな雪がちらつく中で、血けむりと、土ほこりと、白刃のひらめき、馬の悲鳴、兵のわめき聲、さけび聲などが入りまじり、戦場の一つの騒音となつて田圃一面に渦巻き立ちのぼつてゐた。

兵たちは、敵味方、斬合ふと云ふよりも、武器でなぐり合ひ、殺し合ふといふ方がよかつた。太刀で斬り、槍で突き、薙刀で薙ぐのではなくで、太刀や、槍や、薙刀でなぐり合ふのである。あるひは、取つ組み合つてゐるところを、敵の方の足を引つ張つて倒し、折り重なつて敵の上に乗るか、つて首を切るのである。

敵の隙をうかゞつて斬りこむといふより、隙もくそもない、力まかせに斬りつけ斬りつけて、相手をひるませ、さうして斬りつけるうちに、どれか一討ち相手の急所に割りつけてゐるといふ具合である。

馬に乗つた敵にぶつかれば、何よりも先づ馬の脚を拂ふ。落馬する敵に組付いたり、何

人もが一どきに掛かつて押へつけ、横から脇から、刀や鎧通しで刺し、死物ぐるひにもがく敵を、また二三人躍りかゝつて、ねぢ伏せて足をつかんだり、手を抑へたりして、兜のしころの下へ刀を入れて首を搔き切るのである。

楠木方は、おの／＼將を中心にしてそのまはりを兵がまもり、遮二無二、師直の輪違ひの旗を目指して突き進んだ。もう乗馬はすべて傷つき倒されて、將も兵も徒歩で進んだ。すぐ二町ばかり先にある師直の旗本をめぐらして、血まみれの大刀をふりかざし、わき目も振らずに突進する正行の傍を、後を、武者と兵がまもり包んで、鬨の聲もすさまじく、刃こぼれした太刀や、柄の折れた薙刀をひらめかし、菊水の旗、非理法ひりほう權天ごんてんの差物をなびかせ、一團となつて押し進む。

その一團と並んで、摩毘兩天王の差物と、血まみれの白刃に左右と後をまもられて、正時が返り血を胸から、草摺からしたゝらせながら前進する。

正行の右方には、神宮寺源太とその手勢が、更にその右方には野田四郎とその手勢が、一番の右端には、關地良圓とその手勢が、横に一團づゝ並んで突進して行くのである。

一番の左端には、觸躰の切り裂けた差物と、鎧や草摺も切れ飛んでほとんど半裸になつ

た兵どもに守られ、和田源秀が獍猛な突撃ぶりを見せてゐたし、その右方には、芥子あざみの旗を押立て、足に傷を負つた和田高家が、家來の肩を借り、右手に血のりにまみれた大刀をひつさげて、後れじと足をはやめる。

この高家と正時との間に、大塚惟正これまさ、安間了願、その他の部將たちが、それぞれ手勢に周圍を守られ、密集の一團づゝになつて、先をさそつてひた押しに押しすゝむ。

この楠木勢の最後の突撃の體形は、まるで鐵の陣形のやうに強固であつた。どんな敵にぶつからうと、この體形は崩れなかつた。つき當るものを弾はじき飛ばし、押し戻し、踏みつぶし、遮二無二師直の旗本へ向かつて突き進んで行つた。

それは、たとへその前に焰の海、針の山嶽を横たへても、決してはぐむことの出来ないやうな突撃ぶりであつた。

楠木勢のこの突撃の前に立つた敵兵は、あつと云ふ間に倒され、斬られ、踏みつけられ、防がうとする騎馬の將はたちまちにして叩き落されたし、密集した敵の軍勢は將棋倒しに押し戻され、そのなだれを支へ切れず、敵將南次郎みなみ左衛門は安間了願の野太刀に頭のとつぺんから割り下げられ、松田備前次郎は神宮寺源太に兜の鉢を割られ、細川清氏は

郎從七八人の身替りで命から／＼關地良圓の切先をのがれ、そして遂に足利斯波高經したかつねの二引兩びきりやうの旗が後退しはじめ、見る／＼うちに横へ／＼と動いて行つたし、高遠江次郎かうと師繼しりの輪違ひの旗は地に倒れ、朱にそまつた。師繼は馬から跳びおり、勇猛に戦つたが、黒づくめの武装を血糊でぎら／＼と光らせた新發地源秀のために、大薙刀で足を薙ぎ飛ばされ、よろめくところを胴體ふかく割りさかれてしまつた。

師直の旗本も動搖しはじめた。輪違ひの旗が揺れながら北へ動きだした。

——おのれ、師直、逃してなるものか。

正行は足をはやめた。郎從の者も懸命に突き進んだ。輪違ひの旗を菊水の旗がぐん／＼と追ひはじめた。

あと僅かに半町である。今まで横一線を成して押し進んでゐた楠木勢の突撃體形は、正行とその手勢が必死に師直の旗を追ひだしたので、今や正行を先頭とするへの字形を成して突貫した。

「後を見せるとは卑怯なり、師直、返せつ」

と、咽喉一杯に呼ばはりながら、正行は間をさえぎる敵勢を斬り伏せ斬り拂ひ、疾風の

やうに駈け追つた。正時もおくれじと兄の後につゞいた。

さすがに師直、足利の執事としての、また總大將としての恥を心得る男だつたと見え、輪違ひの旗のもとから、馬首をめぐらして引き返して來た。

栗毛の馬に金覆輪きんぷくりんの鞍をおき、紫裾濃すそごの大鎧に金で輪違ひの紋をちりばめ、身のたけ六尺あまり、體重も二十貫はあらうと思はれる堂々たる大將ぶり。なるほど足利がた隨一の權力家としての貫祿十分である。

「やあ／＼楠木勢どもよつく承はれ。八幡太郎源義家みなもとより此の方、源家累代げんけの執權職として武功天下に隠れなき高武藏守師直とは我がことであるぞ。我が劍にかゝつて倒るゝは武門のほまれ、われと思はん者はかゝつて參れ」

四方にとゞろきわたる大音聲であつた。

正行は快心の笑みを頬にうかべ、たゝたゝつと駈け寄つて名乗りをあげた。

「珍らしや高師直とな。われこそは楠木左衛門督正行なり。御身みみの首級を貰ふためにこれまで參つた。いざ見參」

「推參な」

馬上の師直と徒歩かちの正行の長劍が二三度鳴つたと思ふと、師直の栗毛の馬は前脚を拂はれて前へのめつた。

師直、ころげ落ちるかと思ひきや、さつと鞍から飛びおりざまに、眼にもとまらず、正行の腦天のうてんに大刀を斬りおろした。

ぱつと火花が散り、刀と刀が鳴つた。

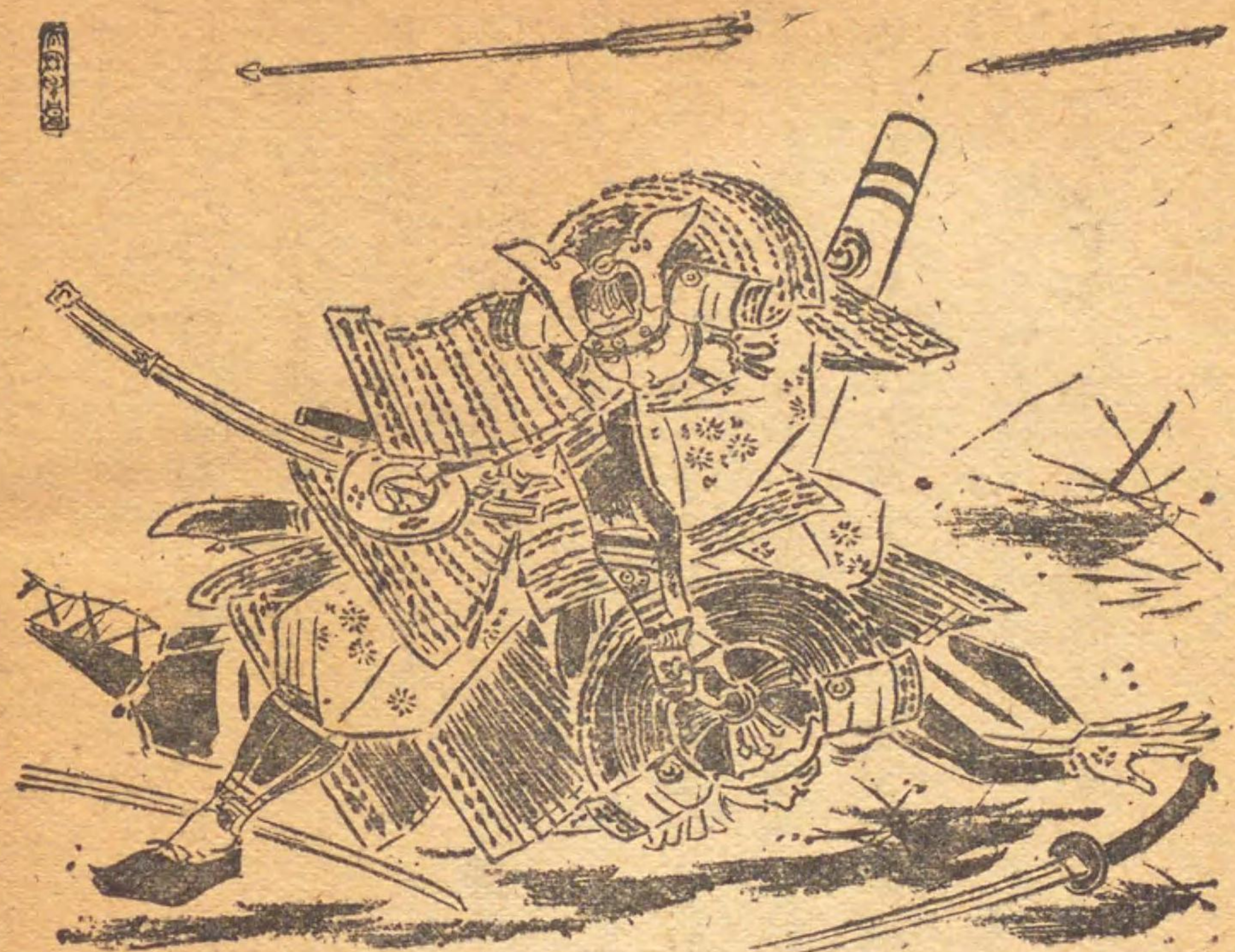
もの凄あやい師直の強力がうりきに、受け拂ふには拂つたが、敵の大刀は正行の兜の鉢を割つた。正行は眼がくらんで前へよろめいた。

だが、からだ前へよろめいた瞬間、正行の入神いしんの劍けんは十分に伸びてゐた。師直の左の腋下わきのしたから背中へ、正行の切先が深く突き抜けてゐたのである。

正行は前のめりに左手を突いたまゝ、師直のからだだが地ひゞきを立て、倒れるのを聞いた。

むしやうに嬉しかつた。胸のうちが、すつと一べんに軽く明かるくなるやうな氣持だつた。

正時が駈け寄つて、のけざまに倒れた師直の首を掻き切り、のめつた正行のそばへ駈け



もどつた。

「兄上つ、傷は」

と聞いた時、正時のうしろから追ひすが
つた敵が、無言のまゝで斬りつけた。

敵は雑賀次郎といふ部將であつた。雑賀
の切先は伸びきらず、正時の鎧を裂いて、
わづかに背さきを傷つけた。

正時が振り返つた時には、雑賀は神宮寺
源太のために組み敷かれてゐた。

「兄上、御本懐」

と、正時は師直の生首を兄に渡しなが
ら、

「だが、お傷は」

と、かさねて聞いた。

「斬られはせぬぞ」

正行はうれしげに師直の首を手にとつて眺め、

「師直つ。師直つ」

と叫びつゝ、地面に尻をついたまゝで、その生首を幾たびとなく宙に投げあげ、落ちて
くるのを手に受けては、また投げ上げた。

正時は眼に涙をためて、兄のよろこぶ姿を見て立ちつくしてゐた。

そこへ、敵將土岐周濟房の首をさげて、安間了願が駆けもどつて來たが、正行の手にし
た師直の首を見て、

「あつ、それは……」

と言つたきり、顔色をかへた。

「うむ、了願、師直の首を討つたぞ」

正行はさう言つたが、了願の顔色を見て、はつとした。

「了願、これは……贗首か」

了願は答へず、たゞはらくと涙をおとした。

正行たちは師直の顔を見知らなかつた。楠木の一族郎黨のうちでは、安間了願たゞ一人が師直を見知つてゐたのだ。

「なんだと、贖首だつ」

正時がうめくやうに叫んだ。

了願は黙つたまゝ、血まみれの拳で涙を押へた。

「柴生。柴生小太郎はゐぬか」

正行が呼ぶと、すぐ後に立つてゐた小太郎が、

「はつ、これに控へてをりまする」

と、地面にひざまづいて両手をついた。

「うむ、そこに居のか。それでは、これはやはり贖首だな。——何者の首か、そちは存じゐるか」

柴生は山名時氏の家來だつたので、師直の一族郎黨はたいてい顔見知りであつた。

「はい。これなるは、高師直が重臣、かうやましのすけたかちと上山修理亮高元の首級に相違ございませぬ」

「さうか。敵ながら、主人の身替りになるとは殊勝しゆしやうな武士。鄭重に埋葬してとらせよう」

さう言つて正行は、師直の贖首を上山修理亮の直垂ひたねを裂いて包んだ。

よろこびが大きかつただけに、落膽もまた大きかつた。

しかも本當の師直は、上山修理亮が討死する間に、馬を飛ばして、こゝ四條から北へ落ちのびてしまつたのである。

「無念だ。残念だ」

正時はなほあきらめ切れず、さう叫んでばかりくと齒をかみならした。

「二郎、もう叫ぶのはやめい。われらは十分に戦ひ、敵の大軍を破つて師直を走らせたのだ。それで満足しよう」

正行は青い顔色だつたが、落着いた聲で云つた。

亂戦死闘の中で、おびたゞしい死者を出した上、楠木勢は遂にいくつかに別れくになつて、正行兄弟と共にこの四條畷に残つてゐる郎黨は三十二名に過ぎなかつた。

源秀や、高家や、大塚などは、どこまでも師直の後を追つて行つたらしい。それらの勇士たちも、今は果してどうなつてゐるであらう。

正行たちは激しい矢玉の集中射しやをあびてゐた。遠巻きに取りかこんだ敵の大軍が、一せ

いに何千本、何萬本といふ矢玉をそゝいで來るのである。しかも、こゝは冬枯れ田圃の中で、身をかくすべき一本の木蔭もない。

夕暮ちかい曇り空に、矢玉の雨は高鳴りのひゞきを立て、射そゝがれて來る。菊水の旗も數知れぬ矢に射縫はれ、誰れもかれも矢三すぢ四すぢ射立てられてゐぬ者はなかつた。とても、刀などで拂ひ切れる矢玉ではなかつたのである。

「二郎、もう最後だ」

「兄上、三十餘合、戦ひ抜いた。この上は、湊川の父上と伯父上を見ならつて、最後を飾りませう」

「よし、刺し違へて死なう。兄弟をろつて、大義に死して大義に生きるのだ」

正行兄弟は、三十二名の郎従と共に、ふたゝび南の方、吉野の行宮に向かつて遙拜した。

——後事は正儀がやつてくれる。思ひ残すことはない。母上、弟たち、われらはこゝ四條畷にてお暇いたします。

鎧をといつて見ると、正行は膝口三箇所と、右の頬、左の眼尻を深く射られてゐたし、正

時は唐胴の引合せと、眉間と、咽喉のはづれとを射られてゐた。

「今上萬歳」

正行の音頭に、皆の者が最後の咽喉をしぼつて唱和した。

正行は正時と向かひ合つて坐り、父がかたみの菊水の短刀の鞘を拂つた。郎黨たちも、めいゝの短刀を抜き放つた。

冷たい風が野づらを吹き、棹の根もとを地に突き刺された菊水の旗は、裂け破れ、血しぶきに赤ぐろく染まつたまゝ、なほさつ／＼とはためいてゐる。

正行兄弟は、につこり微笑してお互ひの顔を見合ひ、短刀の刃に夕暮の光をうつした。それにつゞいて、三十二本の短刀も、一瞬きらりと淡く光つた。

(をはり)

570
276

落丁・亂丁等不完全な品は何卒御申出下さい。御取替致します。

昭和十九年二月十五日
初版印刷
昭和十九年二月十五日
初版發行

四、〇〇〇部

楠木正行
出版會承認番號
い170013號



定價 壹圓八拾錢
特別行爲稅相當額 八錢
合計壹圓八拾八錢

著者 明石鐵也
あかし てつや

發行者 藤岡孫市
ふじおか まごいち

印刷者 櫻井忠三郎
さくらい ちゆうざん

東京都神田區神保町三丁目二十九番地

發行所 室戸書房

電話九段(33)〇一九四番
振替口座東京一〇六一四番
會員番號一三三〇一五號

配給元 東京都神田區
淡路町二丁目九
日本出版配給株式會社

八紘印刷株式會社印刷

コトヒ-19



賣價(税込) ¥1.88

